

杉浦君の表紙畫

黒田清輝氏(談)

◎日比谷の圖書館で表紙畫、裝幀、エキスリプリス藏書印等の展覽會があるといふ事は新聞でも見ましたし、又杉浦君から招待状を貰つたので知りましたが、私は第一に慙ういふ計畫のあるのは誠に結構な事であると思ひました。元來書籍の裝幀に重きを置かぬといふのは、費用の點もある事でせうが、外國では古くから裝幀に就ては餘程研究されて居まして、之が陳列會などもあるやうですが我國では今まで一向さういふ話も聞きませんでした。ところが今度日比谷圖書館で企てられたのですから私は非常に面白い事だと思つて居ました、之から先も慙ういふ事は度々やつて見たいものです。

◎一體書籍の裝幀を美しくするといふ事は、裝飾ばかりでなく、或意味に於ての實用であつて、表紙の意匠は其内容と相俟つて深い關係がなければなりません、日本の書籍——殊に洋書の如きは近年になるまで餘り見るべきものがありませんでした、藏書印にしても外國の如く美術的の圖案を拵へて、それを自分の藏書の證とするといふ事は誠に面白い事ですから、日本でも慙ういふ方面を開拓して何とかすれば、更に面白いものが出来ることとせう。

◎あの展覽會にある表紙畫は、杉浦非水君一人のものでありますが、表紙畫は最も日本の現代では必要なものゝ一です、之とても十四五年前に溯れば誠に幼稚極るものであつて、確三十年頃かと思ひますが、『新小説』の表紙に

私共の關係ある人どもで懸賞の表紙畫の圖案を募集した事がありました。其當時當選した人で今では有名になつて居る人もあります。其時代に比較すれば今日の圖案の進歩といふものは非常なもので、現今では雜誌の表紙とも云はれるもので、幾分裝飾を施してないものはなくなりしました。

◎然し其中でも杉浦非水君の圖案——殊に『みつこしタイムス』『三越』などの表紙圖案の如きは、實に巧妙なものであります。數年前の表紙畫は殆ど多くは更紗形だとか半襟のやうなもので、内容とは何等の關係もなく、また口繪にしても色彩の配合線の配置に何等の工風がなく、單に繪や色をあしらつてあるといふまででしたが、今日の非水君の圖案を見れば誠に行き渡つたものであつて、表紙を見れば之は凡そ何ういふ内容のものであるといふ事も伺ひ知れる。又季節に應じて誠に目新しいものを書き現はし、然も色彩の配合にしても人目を惹くのみならず、又決してたゞ廣告一遍の野卑なものと違ひ、寔に優しい線を用ゐて調和好き色を配してあります。

◎それが『三越』及『みつこしタイムス』に於て殊に見えますが、夫程印刷に費用を要して居ない、簡単に制限されたものさへもなかく立派なるものがあつて、人の目を惹く點に於て又敢て下品でない。杉浦君は書生時代から私の知れる人でありますが、極めて眞面目な修業をした人であつて、天然の趣味があの人程圖案に適した人は誠に尠いと思ひます。明治三十六年には大阪で『三十六年』といふ雜誌の表紙を書いた事がありました。其時既に變化に富んだ面白味のある表紙畫を毎號つゞけて書かれて、今日あるは其時既に伺ひ知られました。

◎然し『みつこしタイムス』あつて杉浦非水君の技倆は益々進み愈々發展して來ました。先づ今日少し賞め過ぎるかも知れぬが、私の知れる範圍では、あの人位に表紙の圖案を完全に書く頭のある人は、他に見出す事が出來ん

と思ひます。畫家としての希望から、私の個人としての感覺を言ひますれば只一の缺點があります。缺點とは言へぬかも知れぬが——餘り上手過ぎる、上手過ぎるといふは缺點といへぬけれども、餘りに器用で餘り立派で餘り綺麗である爲め、私個人として感ずるのは、今少し拙い事がです——拙いと言つても見苦しいではない。今までの如く立派であつて、そして今少し達者と何か巧妙とかいふ事が見えなければと思ふ。之は杉浦君は出来ぬ事はない、しやうと思へば彼の^あ技量では屹度出来るけれども、私の希望するやうな事は『三越』『みつこしタイムス』や現代の雜誌には不必要の事であらう。

◎氣が付いてもやらぬ、やらうと思へば何でもない、が、之をやれば或は人の氣に入らぬ事になりはしまいか、結局私の申した缺點とか、希望とかいふのは、私個人としての考へで、決して非難した譯ではない、又技倆が達するか、達せぬかの疑を抱いて居るといふのでは決してない。先づ之を申せば、實に思想技術の上に現代に適當した圖案畫家は他に求むる能はずと私は深く感じて居ります。ですから『三越』及び『みつこしタイムス』は杉浦君に依つて益々表紙として廣く世間の雑誌を凌駕し、杉浦君は之に依つて十分に其技量を揮はれん事を希望します。

◎あの『子寶』の如きも、誰でも氣の附く事でせうが、表紙の色なども友禪染になつて居る、これ杯も甚だ面白い、色取りをして斯程までに苦心して居るかといふ事は、一見しても知られるので、一遍の責ふさぎの物などとは大に其選を異にして居ます、恠ういふやうな注意が其技倆の發達を助けるといふのは決して偶然の事ではなからうと私は信じます。

明治四五年三月三十一日～四月二日に日比谷図書館で開催された杉浦非水の「書籍装幀雑誌表紙図案展覧会」を受けての所感。非水は明治四二年より三越呉服店に勤務し、そのPR誌である『みつこしタイムス』や『三越』の表紙デザインを担当、日比谷図書館での展覧会はそれらの仕事を含めた書籍装幀や雑誌表紙等により構成された。

図案家として名を馳せた杉浦非水（一八七六～一九六五年）は、明治三〇年に合田清の紹介により黒田の知遇を得、同三四年には一時期黒田家に寄寓し、その門人となった。一九〇〇年パリ万国博覧会を見聞した黒田の持ち帰った諸資料により、非水はアール・ヌーヴォーに開眼したという。黒田と非水の交流については、黒田の逝去に際し非水が『都新聞』に寄せた「黒田清輝先生」（大正三年七月一七～二〇日）を参照。